

なぜ、祖父母と向き合えないのか

埼玉県 狭山市立中央中学校 3年

齊藤 美沙子（さいとう みさこ）

私には、八十代の祖父母がいます。けれど、恥ずかしいことに長い間、きちんと向き合うことが出来ませんでした。

祖父は認知症がかなり進んでいます。「美沙子だよ。おじいちゃんの孫だよ。」と言っても「みさこ。あれっ。ええと……。」となかなか分かってもらえません。そのようなやりとりが続くと次第に私は不安になります。祖父の部屋に飾られた私の書初め作品も、誰が書いたものなのか分かっていないそうです。このまま忘れられてしまったら。そう思うと、段々と自分から話ができなくなってしまいました。

祖母は両足の股関節の手術をしているために杖なしでは歩行できません。だからこそ私が優しく声をかけたり、手を貸してあげたりしなければいけないということは分かっています。分かっているのですが、「何だか照れくさい」という気持ちに負けてしまいます。さらには、いずれ自分もこのように体を動かさなくなるのでは、という恐怖さえも覚えてしまい、ますます自分から手助けをすることが出来ずにいました。

そのような祖父母ですが、幼い頃の私はよく面倒をみてもらっていました。おんぶや抱っこはもちろんのこと、一緒にトランプやオセロで遊んでもらったり、お弁当を作ってピクニックに連れていってもらったり、おままごと用のいすを作ってもらったりと、とにかくたっぷりの愛情を注いでもらいました。それなのに、なぜ自分は手を差し伸べることができないのでしょうか。不安や悲しみ、照れくささ、そんなことで二の足を踏んでしまう自分がとても情けないです。

そんなある日のことです。朝、いつものように新聞を読んでいると、投稿欄に私と同じ中学三年生の投稿を見つけました。私は、同じ年齢の人が投稿していることにも驚きましたが、何よりもその内容に強く心を打たれました。彼は幼い頃に祖父母を病気で亡くし、会いたくても会えない。恩返しをしたくてもできない。それはまさに私自身の未来を予言しているかのようでした。

「このままでは絶対に後悔する。祖父母と話せることは、それだけですごく幸せなことなんだ。」

変わろう。特別なことでなくていい。自分から声をかけたり、手をさしのべたり。当たり前のことを当たり前のように、今までの恩返しが少しでもできるように。変わろう。そう決意しました。

それから一ヶ月が経ち、祖父母の家に修学旅行のお土産を渡しに行きました。祖父は生八つ橋を口にしながら何度も「こりゃあ美味しいなあ。ありがたいなあ。」と喜んでくれました。また祖母は、昔、夫妻で清水寺を訪れた思い出を懐かしそうに話してくれました。隣では「そうだそうだ。」と祖父も嬉しそうに頷いて、母も含めて四人で京都の思い出を語り合い、とても楽しいひと時となりました。

そうそう、忘れられないすてきなエピソードがもう一つ。祖父の部屋に飾られた私の書初め。それを見た祖父が「こりゃあうまいなあ。誰が書いたのだからやあ。」と言いました。

「みさこが書いた〈素直な心〉っていう字だよ。」

「そうかあ。人間は素直で正直が一番大事だいなあ。それから、人から信頼される人間になりたいなあ。」

それを聞いて私は、今まで誰のか分からずにただ飾っているだけ、とふてくされていた自分が恥ずかしくなりました。心を込めて書いた字は祖父の心にもきちんと届いているのだ、と。

「あれっ、みさこっていうのは、俺の新しい嫁さんだっけかやあ。こんなに若くてかわいらしい嫁さんがいたのじゃあ、俺もあと少しだけ頑張るかな。」

冗談なのか本気なのか、祖父の言葉は皆を笑顔にさせてくれました。

人は少し記憶することが困難になったり、体が不自由になることがあります。けれど、それだけで人の価値が決まるわけではありません。大切なのは心が健やかであること。優しさと思いやりの心を持った祖父母は私の誇りです。祖父母の力になりたい、と思っていました。実はまだまだ祖父母から学ぶことのほうが多いと今では感じています。

近頃、ご近所の高齢者の方と話す機会が増えました。先日は九十九歳のおばあちゃんが自分で育てたお野菜を持って来て下さり、私の曾祖父にお世話になって感謝していると話してくれました。「人から信頼される人間になりたいなあ。」と言った祖父の言葉を思い出しました。私も曾祖父のように人から信頼される人間になりたいと思うと同時に、常に感謝する気持ちを忘れないこのおばあちゃんのように年を重ねていきたいです。